

卒業写真



「悲しいことがあると開く皮の表紙 卒業写真のあの人は優しい目をしてる」(『卒業写真』)

卒業式と言うと、私は真っ先にこの曲が頭に浮かぶ。ユーミンという愛称で幅広い年齢層から愛されている松任谷由実の楽曲は、ジブリの映画で知っている曲もあるのではないか。『魔女の宅急便』の「あの人のママに会うために今一人列車に乗ったの」(『ルージュの伝言』)、「小さい頃は神様がいて不思議に夢をかなえてくれた」(『やさしさに包まれたなら』)、『風立ちぬ』の「空に憧れて空をかけてゆく」(『ひこうき雲』)など、今でもあちこちで聴かれる。彼女は今年、デビュー50周年を迎えた。

先日、久しぶりに自分の高校時代の卒業アルバムを開いてみた。私の頃の卒業写真・卒業アルバムは、モノクロのページの方が多いいくらいだ。見つけた。硬い表情で写っている。しかも丸坊主。当時の野球部員はどの学校の部員も丸坊主だった。何を考えていたのだろう、思い出せない。40年も前のことだから仕方がないかもしれないと思っているとき、ふと頭に浮かんだ。今のように部活動の休日が定期的に設定されていなかったから、休みもなく、来る日も来る日も練習に明け暮れていた。雨が降ったり、定期考査前だったりして、練習が休みになることをひたすら願っていたような気がする。野球は嫌いじゃなかった。でも、練習が休みになることをひたすら願っていたような気がする。

大学でも野球を続けた。高校の最後の大会の前に病気をして、万全の体調で出場できず、心残りがあったからだ。大学ではやらされる練習ではなくなった。いつの間にか、練習が休みになることを願わなくなっていた。楽しかった。その後私は、野球が仕事の一部になった。高校の国語の教員として兵庫県に採用になり、1年目から野球部の監督をさせていただいたからだ。そして今、ここにいる。

卒業アルバムを前にし、「あの最後の大会の前に病気をせず、高校野球をやりきった満足感に浸って、野球を続けていなかったら、どうなっていただろう」と、ふと考えていた。頭の中では、「悲しいことがあると・・・」とユーミンが歌っていた。

制服

もちろん、あの頃気になっていた女の子の写真も目に付いた。バレーボール部所属。九州に修学旅行に行った際、一緒に写真を撮ってもらったことが嬉しかった。しかし、その時は見事に撃沈していた。思うように気持ちを伝えられない歯がゆさ、思うように事が運ばない苦さを思い出していた。「あの時、その女の子と付き合っていたら、どうなっていただろう」と、ふと考えていた。頭の中を流れていたのは、「そうこのままでいいの ただのクラスメイトだけで」松田聖子の『制服』だった。



3年生は2月2日から自由登校

3年生の卒業考査も終了し、「高校生活最後の〇〇」がほぼ終わりに近づき、あとは卒業式とその関連行事だけとなった。この素敵な制服を着る機会も数えるほどになってしまった。3年生はきれいに着こなし、この制服の価値を高めてくれた。だからこそ、カジュアルウィーク・フライデーが円滑に実施できたし、ハロウィンも任せることができた。制服を最後まで美しく着こなすことで、これを本校の学校文化にまで育てていってほしい。そこには、1・2年生の役割も大切だ。上級生がその自覚をもって行動すれば、下級生はそれを見て生活する。新1年生にも伝えていく。その連続が伝統・学校文化に昇華してゆく。伝統校の強みはそこにある。本校も令和6年度には、50周年を迎える。「本校の新たな伝統」を「本校の学校文化」を生徒の皆さんの手で築き上げてほしい。そのチャンスが今ここにある。

3年生の皆さんは、3年分の思いを込めて、1・2年生が憧れる立派な卒業式にしよう。挨拶日本一の高校を目指す本校だから、いい返事、いい姿勢で、みんなが笑顔になる卒業式にしよう。1・2年生の役割も大切だ。協力願う。楽しみにしている。

2月3日、マラソン大会！！

コロナや天候の影響で実施できていなかったマラソン大会が3年ぶりに実施できそうだ。昨日の自分からの成長を目指して、取り組んでみよう。無理しすぎず、おかしいと思った時、やめる勇気も大切だ。

We keep on trying. 挨拶日本一の高校・遅刻ゼロの高校に私たちはなる 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩